

横山ゆずり作 「ご利益」

<前編>

(効果音) (始業のチャイム)

先生 今日はず、この間のテストを返すぞ。名前を呼ばれた者から取りに来なさい。
えー、新井。

生徒 はい。

(効果音) (机やイスのガタつく音。教室のガヤ。)

先生 井上。

生徒 はい。

先生 大川。

大川邦子 はい。

(効果音) (FO)

美穂 邦子、どうだった？

邦子 うん、まあまあだよ。美穂は？

美穂 もうサイテー！ いいなあ、邦子は。国語が得意で。

邦子 自信あるのは、これだけだからね。それよりさ、美穂、あんたさっきから答案返される時、何かゴチャゴチャ言われてなかった？ ヘンな間違いでもしたの？

美穂 ああ、あれね。あれは名前のこと。

邦子 名前？ かき忘れたとか？

美穂 ううん、そうじゃなくて。これ見てよ。

(効果音) (答案用紙の紙ずれの音。)

邦子 ちゃんと書いてあるじゃない。

美穂 よく見て。あたしの“美穂”の“穂”っていう字、“禾偏”に“恵”^{めぐみ}って書くじゃない。あの中山美穂とおんなじ。ところがさ、最近、ほら、ここんとこ、“恵”の右上に“^{ちよん}”^{のぎ}って点付けて書いてんの。それで、さっき先生に「お前、自分の名前の漢字、間違えてどうする！」って言われちゃったんだよ。

邦子 ほんとだあ。だけど何でわざわざそんなことすんの？

美穂 それがね、実は… 笑わないでよ。少し前にね、うちの親が、姓名判断の人に見てもらったのよ。そしたら、うち中であたしの名前だけ画数が悪いんだって。でもそんなこと今更言われてもさ、名前を変えるわけにもいかないし。しょうがないからチョン付けて、1画増やしたってわけ。

邦子 へえ。姓名判断ねえ。美穂でもそんなこと、結構気にするんだ。

美穂 まあね。やっぱりちょっと怖いし。

邦子ナレーション わたしは大川邦子。青春中学の3年生。そろそろ受験のことも真剣に考えなき

やなあなんて思ってる今日このごろ。でも、部活の夏の大会もあるし、生徒会の役員、それに、小学生のころから通ってる教会学校の中学生会…と、いろいろ忙しいのです。それに、楽しみにしていた修学旅行は、もう目の前。

(効果音)

(屋外のガヤ。車の音など。)

生徒 A 3班の人、集まってくださいーい！

生徒 B あ、おれの班、どこだあ？

生徒 C ちょっと、おしゃべりやめてくださいーい！

先生 おーい、班長は点呼取ったら速やかに報告しろ！

ナレーション 待ちに待った修学旅行で、わたしたちは京都にやってきた。さすがは“千年の古都”。古い町並みがあるまま残ってる感じ。それにしても、毎日、ナントカ寺、カントカ神社ってたくさん回って、全然覚えられないけど、まあいっか。

美穂 邦子。あんたさっきからどこ行っても絶対お賽銭出さないね。ケチ！

邦子 失礼ね。ケチってるんじゃないの。こう見えてもあたしはクリスチャンなんだから！ 神社やお寺では拝まないし、お賽銭もあげないの。

美穂 あ、そうだったよね。邦子、教会行ってたんだっけ。あたしなんて、すごい奮発してさ、なんと500円もあげたんだから！ ご利益がありますようにっつと。

(効果音)

(美穂がパンパンと拍手を打つ音。)

邦子 それで、どんなお願いしたわけ？

美穂 まず何てったって、受験のこと。ここは学問の神様だからね。それから“恋愛成就”。すてきな彼氏ができますように。あとね、今度の試合は決勝まで行けますように。それから…。

邦子 まだあるの？

美穂 そりゃそうよ。500円も出したんだもん。えーと、あとダイエットに成功して、5キロはやせられますように。それから、この前買った宝くじが当たってますように。こんなもんかな。

邦子 それだけ欲張れば十分よ。あきれた。

美穂 まあいいじゃない。元は取らなきゃ。ご利益ご利益っつと。

邦子 ハァー(ため息)

美穂 それはそうとさ、邦子。あんたのお仲間がもう1人いるみたいよ。

邦子 え？

美穂 (声を潜めて)ほら、榎本剛。あんなどこに立ってるじゃない。あたし、さっきから気になってたんだけど、あの子も、昨日からどの寺でも神社でも、お参りしてないみたい。もしかして、榎本もクリスチャンかねえ。

邦子 さあ。話したことないから分かんないけど。でも何か顔、怖くない？ 怒ってるみたいだよ。

美穂 さあ。あいつ最近、暗いもんねえ。あたし、1年の時から同じクラスだったけど、

前はあるじゃなかったよ。明るくて、面白いやつだったけどなあ。

ナレーション 美穂の言葉が何となく胸に引っかかったものの。修学旅行の楽しさと疲れに紛れて、いつの間にか忘れていた。修学旅行から帰って次の日曜日、わたしは、京都のお土産を持って、教会に行った。

中学生会の友人女子 邦子ちゃん。旅行、楽しかった？

邦子 うん、すっごく。夜遅くまでしゃべってしかられちゃったけど。

友人男子 お寺とかばかり見たろ？ 拝めって言われなかった？

邦子 あ、うちの学校の先生は、強制はしなかったから。それに、友達もあたしが教会に行ってること知ってたから。でも驚いちゃった。クラスの子なんて、お賽銭あげた分、元取らなきゃとか言って、すっごいたくさんお祈りしてるの。

会の先生 “元を取る”か。なるほどね。考えてみると、おかしいよね。もともと人間が自分の手で仏像とかご神体を作っておいて、今度はそれを信心の対象にして、願い事をしたりするっていうのはさ。

女子 本当は、みんな信じているわけじゃないと思うんです。でも一応、何か手を合わせておけば安心、みたいな。

男子 そうそう。うちのクラスの女の子なんて、雑誌の星占いのページなんか必死で読んでるよ。「今日は黄色がラッキーカラー」とか言って、黄色いペンでノート書いたりするんだよ。

邦子 そう言えば、あたしの友達も、姓名判断で名前の字変えた子がいるの。

先生 へえ。今の中学生って、現代っ子のイメージと違って、随分古臭いことにこだわるんだねえ。

女子 ううん、先生。今は“コンピューター占い”なんていうのもあるんですよ。

先生 コンピューター占いねえ…。

ナレーション そんな話題が中学生会で出て、しばらくたったある日。秋の文化祭も2か月後に迫ったので、クラスの出し物を決めることになった。

ホームルーム委員 それでは、どんどん意見を出してください。えーと、今のところ、ステージでやるものとしては、合唱、バンド演奏。教室だとしたら、研究発表か、お化け屋敷ということですが。

女子 はい！ ステージだと、リハーサルとかが大変だし、出る人も限られちゃうから、教室で展示するほうがいいと思います。

生徒(口々に) 賛成！（拍手の音）

HR 委員 じゃ、教室でやるとしたら、何がいいですか？

生徒女子1 やっぱ、お化け屋敷だよ。

男子2 ダセえよ、そんなの。

男子3 じゃあ何だよ。

女子4 模擬店は？

女子1 ダメ、禁止だもん。

女子4 じゃ、星占いコーナーは？

(口々に) いいわ。いいね。

女子1 やだよー。

HR 委員 静かに！(ドンドン机をたたく)発言は、ちゃんと手を挙げてください！ 今、“星占いコーナー”という意見が出ましたが、それについて、どうですか？

女子1 はい、星占いだけじゃなくて、タロット占いとか、パワーストーンとか、いろんなコーナーを作って“占いの館”^{やかた}みたいにするのは？

男子3 占いなんて地味だぜえ。もっとパーっと派手なやつがいいと思います。

女子4 あら、“占いの館”やったら、女の子がいっぱい来るわよ。

男子2 そっか。いい、いい。おれやっぱ占いでいいっす。

HR 委員 ほかの人はどうですか？ 反対の人いますか？ いたら手を挙げてください。

榎本 (挙手)

(効果音) (教室内、一瞬ざわめく。)

HR 委員 反対は榎本君1人ですか？ 反対の理由があったら言ってください。

ナレーション “占い”なんて…。“反対”って手を挙げようかどうしようかと迷っていたわたしの頭に、修学旅行の時、一人で神社仏閣に背を向けていた榎本君の姿がよみがえってきた。でも、なぜ彼は…？

榎本剛 “占い”なんて、くだらないよ。

(効果音) (更に教室のざわめき。ブーイング。)

ナレーション 正直言って驚いた。あのおとなしい榎本君が、あんな問題発言するなんて。皆も一瞬、信じられないような顔をしていた。

女子4 それじゃ理由になりません！ ちゃんと説明してください。

榎本 だから、おれは“占い”そのものが、非科学的でバカバカしいって言ってるんだ。星占いとかパワーストーンとか、一体何の根拠があって…。

男子3 そんなにクソまじめに考えんなよ。これは一種のお遊びなんだからさあ。

榎本 始めはみんな、遊びとか軽い気持ちで入るんだよ。だけど、だんだんそれがないと不安になって、頼らずにいられなくなる。しまいには、自分自身で何も決められなくなってしまう。占い師の声が神の声みたいに聞こえて…。おれのうちみたいに、家庭がメチャクチャになってしまうことだってあるんだ！

ナレーション こぶしを握り締めたまま、そう叫んだ榎本君の声に、一瞬、クラス中がシーンと静まり返った。

<後半>

ナレーション わたしは大川邦子。青春中学の3年生。この間のホームルームの時間、我がクラスでちょっとした事件が起こった。文化祭の出し物を決めようということで、“占

いの館”にほぼ決まりかけた時、普段はおとなしい榎本君が、突然、異議を唱えたのだ。榎本君の「占いなんて、くだらない」の一言に、みんな一瞬ビックリ。わたしはクリスチャンなので、“占いはやだな”とは思っていたものの、何て説明すればいいんだろうと、おじけづいていたところだったので、彼の発言はショックだった。特に気になったのは、彼の最後のセリフだった。

榎本 ナレーション 占いなんてもののせいで、おれの家庭はメチャクチャになってしまったんだ！でも結局、賛成多数で、“占いの館”に決定。わたしは、直接占いを担当する役から外してもらい、裏方に回ったものの、自分の意見をきちんと言えなかった後悔と、妥協したような後味の悪さを感じていた。それだけに、皆のまできっぱりと反対を言い切った榎本君が気がかりだった。

美穂 ねえねえ邦子。こないだのホームルームの時の榎本発言、覚えてる？

邦子 占いに反対したこと？

美穂 うん。それでさ、「占いの生でこれの家庭がどうのこうの」って言ってたでしょ？

邦子 うん。

美穂 あたし、うち帰って、お母さんに聞いたのよ。ほら、うちの親、PTA で結構顔広いし、何か知ってんじゃないかと思って。そしたらさ、もうヒックリよ。

邦子 何なのよ？

美穂 何と、榎本のお母さん、中1の終わりごろ、うちを出てっちゃったんだって。それがさ、ナントカっていう占い師だか教祖様だかのところに、転がり込んで、居着いちゃったんだって！

邦子 ナントカって何よ？

美穂 そこまでは分かんない。何か聞いたことないけど、テレビとか週刊誌とかも出たことのある人だってよ。

邦子 それ、ほんとなの？

美穂 多分、最初は小さい弟さんとかもつれて入っちゃったんだけど、お父さんが連れ戻しに行って、ゴタゴタして、結局離婚だって。

邦子 ちっとも知らなかった。

美穂 うん。だれも知らないと思うよ。他のクラスの先生たちにも知らせてないと思う。榎本や弟は、お父さんのほうにいるから、名前も変わらないしね。

邦子 それでこの前、あんなことを…。

美穂 そうだよ、きっと。榎本、占いや宗教は嫌いなんてものじゃなくて、心底憎んでるって感じだったもんね。

ナレーション わたしは、榎本君の言葉の重さを感じていた。あの修学旅行の時、彼の表情に何となく浮かんでいた怒りは、これだったんだと思った。その次の日曜日…。

(効果音) (教会のBGM、賛美歌など。)

中学生会の先生 それで大川さんは、その榎本君という男の子と、その後、話してみたの？

邦子 いいえ。今までもほとんどしゃべったことない子だし、それに、あのホームルーム以来、榎本君、ほとんどだれとも口を利かないんです。

友人1 自分の一番深い心の傷を、人に知られたくないのかもしれないね。

邦子 わたしもそう思う。っしばらくはそっと見てるしかないと思うんです。それよりわたし、ショックだったのは、自分がいざとなると、皆の前ではっきり「占いはやめよう」って言えなかったことなの。どこがどういけないってちゃんと説明できなくて、それに皆、どうせ遊びだからって分かってるんだからって。でも榎本君のお母さんみたいに、のめりこんで家庭を壊してしまう場合もあるのかと思うと、何となく怖い。

友人2 何か、そういう気持ち、分かる気がする。自分はクリスチャンだから、神様を信じてるけど、友達が星占いでキヤーキヤー言っても、何も言えないよね。それどころか、雑誌の星占いのページで、自分の星座で悪いことが書いてあると、イヤァな気持ちになる。

邦子 そうなの。いいこと書いてあっても、「ケッ、こんなのウソウソ」とか思えるけど、悪いこと書いてあると、何か無視できない感じ、あるよね。

先生 うーん。それは人間の心の中にある“恐れ”なんだな。じゃあ聞くけど、みんなが信じてる神様って、どんな方？

友人1 それは、もちろん全世界をおつくりになって…。

友人2 わたしたち人間もつくられた方。

友人3 今も、この世のすべてを支配しておられる方。

先生 何だ、君たち優等生だなあ。頭ではよく分かっているじゃないか。宇宙をつくられたのは神様だろ。もちろん、星の運行を定めておられるのも神様だ。だとしたら、それらのつくられたものが、独自のパワーを持って、人の生き方を左右するのはおかしいだろ？

友人1 確かにそうですよね。それに、例えば乙女座と言っても、それこそ、何千万、何億っていう乙女座生まれの人が、同じように生きるわけがないし。

先生 うん。それはとつても大切なことだね。神様は、わたしたち人間を、単なる操り人形のようにつくられたわけじゃない。

友人2 一人一人に個性と自由意志を与えてくださったんですよね？

先生 そう。だから神様は、一人一人の人生に、特別なご計画を持っておられるんだよ。そのために、個性を与え、自分の意志で人生を選んで、時には失敗から学びながら生きていくように、導いてくださるんだ。それは、神様の愛から出た最善の道なんだよ。

友人1 結局、その神様を知らないから、何かに頼りたくなるし、何か超自然的存在のいうとおりに生きようとしちゃうのかな。

先生 そう。ある意味でそれは、創り主の神様を離れた人間の当然の姿だろうね。そし

て心の中には、いつも恐れと不安を抱えている。

邦子 そうそう。みんな、失敗するのがすごく怖がってる気がする。受験とかでも、あらかじめ自分の偏差値に合ったとこ調べて、受かりそうなどこしか受けないし。

友人1 今、何でもマニュアルがあるもんね。友達付き合いでも恋愛でも。雑誌やテレビとかで“こうすればうまくいく”って教えるでしょう。だから、いざ自分で考えろって言われると、どうしていいか分かんなくなる。

先生 そうか。それで占いやおみくじに助けを求めるわけか。

邦子 そうなんです。そして、神様でも仏様でも水晶玉でも、とりあえず何かお願いしとこうかなっていう。

先生 うん。そういう気持ちなんだろうねえ。だけど、100年や200円のお賽銭で、いや、たとえ100万、1,000万のお金でもだよ、お賽銭をあげたお返しにいいことをしてくれるなんていう神様は、おかしいよね。それじゃ神様との“ギブ・アンド・テイク”じゃないか。本当の神様は、そんなケチな方じゃない。わたしたちに必要なものなら、ただで惜しみなく与えてくださる方だよ。君たちはこの神様を信じ、このお方に守られている。これはすばらしい恵みなんだ。このお方を一人でも多くの友に伝えるのが、君たちの務めだ。そうだろう？

ナレーション 教会からの帰り、わたしは中学生会での会話を思い出していた。わたしや教会のみんなは、本当の神様を知っているから、占いに頼ったりしなくても安心していられるし、人間の手で作ったものを拝んだりもしない。でも、同じ占い嫌いでも、榎本君は…？ 榎本君が、お母さんを取っていったナントカっていう占い師を、とても憎むのは分かる気がするけど、でも、彼の心にあるのはその憎しみだけ。きっと、本当に信じられるものはないんだろうな。そう考えていたら、何だかすごくかわいそうに思えてしょうがなかった。榎本君にも本当の神様を教えてあげたい。とうとうわたしは、思い切って彼のうちを訪ねてみることにした。

邦子モノローグ もしかしたら、迷惑がって話してくれないかも。でも、ダメでもいいから、とにかく行ってみよう。

(効果音) (玄関のチャイム)

榎本の父 はい、どちら様ですか？

邦子 あ、わたし、青春中学3年2組の大川ですけれど、榎本君いますか？

父 (ドアのロックを「ガチャッ」と開ける) ああ、剛のクラスの。どうぞ入ってください。
(奥に) 剛、剛、お友達だぞ。

剛 (奥から) だれ？ (出てくる) 大川…。

邦子 あ、榎本君。いきなり家に押しかけてきちゃってごめんね。あの、ちょっと話したいことがあって。実は…。

父 剛、そんなとこじゃなくて、上がってもらいなさい。

邦子 いえ、いいんです、ここで。すぐ帰りますから。あの、文化祭のクラスの出し物の

ことなんだけれど。

剛 おれ、絶対協力なんかしないからな。

邦子 違うの。聞いて。わたしも本当は“占いの館”なんてイヤだったの。実はわたし、クリスチャンで、教会に行ってるの。だから、占いなんて信じてない。そのこと、榎本君にはちゃんと言いたくて。

剛 何でわざわざおれにそんな…。お前、まさか、おれんちのこと…。帰れよ、帰ってくれよ！ お前には関係ないことだろ。おれは占いも嫌いだけど、宗教も大っ嫌いなんだよ！

(効果音) (バタバタ2階に駆け上がる音)

父 剛、おい、剛！ すみません、本当に。せっかく来てもらったのに。

邦子 いえ、わたしのほうこそ、立ち入ったこととしてしまってすみませんでした。

父 あ、大川さん。もしかしたら、我が家のゴタゴタのこと、ご存じなのかな？

邦子 はい。…あ、あの、いいえ。

父 そうですか。いや、お恥ずかしい。家内がとんでもないことしてくれて。息子同様、いや、それ以上に、父親のわたしのほうが落ち込んだりしましたけどね。最近やっと、家内をそこまで追い詰めた責任は、自分にもあると思えるまでになりました。でも息子にとっちゃ、どうしても赦せんのですよ、まだ。今日はあんな態度で本当に申し訳なかったですけど、どうかこれに懲りず、あいつの力になってやってくれませんか。お願いします。

邦子モノローグ 榎本君、わたし、あきらめない。あなたに本当の神様をしてもらうまで、わたし、絶対にあきらめないからね。

ナレーション わたしは帰り道、心の中でそう繰り返していた――。

<完>